

高等教育の国際化に関する研究の展開

—比較的な視点—

黄 福 涛*

1. はじめに

高等教育の国際化は決して高等教育における新しい現象ではないし、新しい研究分野でもない。特に1990年代以後、経済などのグローバル化の進展及びITの急速な発達に伴って、ヨーロッパをはじめ、多くの先進国と発展途上国において、高等教育の国際化に関する様々な改革の試みを実施されると共に、それに関する研究もより一層盛んに行われている。しかし、高等教育の国際化に関する研究の歴史的展開及び先行研究の成果について、特に比較的な視点からは、十分に検討されていないのではないかと考えられる。従って、本稿では、比較的な視点から、特に1990年代以降、日中両国に焦点をあてて、欧米主要国の高等教育の国際化に関する研究の歴史的展開及び先行研究の成果を整理すると共に、それに対する評価を行うことにする。なお、高等教育という概念は多義的であり、本論文で使用する高等教育は大学の意味も含んでいる。

2. 研究の歴史的展開

日本語の国際化は、英語の internationalization の訳語である。英語の internationalization という単語は、少なくとも1883年から使われていた¹⁾。しかし、研究分野あるいは研究領域としての高等教育の国際化、すなわち internationalization of higher education が広く使われるようになったのは、おそらく20世紀後半であろう。

高等教育の国際化に関しては、古くから問題提起が行われてきた。その研究の歴史的展開は、少なくとも19世紀まで遡ることができる。当時ヨーロッパにおいては、universalism 精神を持っていた中世大学が国家・民族としての近代高等教育機関へと変貌を遂げる転換時期だった。19世紀後半まで、主にフランス、イギリスとドイツを中心に、三つの近代大学モデルが形成されてきた。ほかの国々にとっては、こうした近代高等教育制度を理解、模倣、及び導入するために、留学生の流動・学者訪問をはじめ、国際的に高等教育の交流が行われると同時に、国境を越えて、他国における高等教育に関する情報の収集と研究も展開されてきた。特に19世紀以後、西洋諸国がアジア、アフリカ及びラテンアメリカなどの地域へ植民拡張を行ったのに伴って、西洋以外の地域に関する文化と教育の研究が必要になった。従って、20世紀前半まで、高等教育の国際化に関する研究は、基本的には比較的な視点から、「理解のため」に、異国における高等教育に関する知識の収集と整理を行うという形で展開されていた。

* 広島大学高等教育研究開発センター助教授

第二次世界大戦以後、多くのアジア、アフリカ諸国が独立し、また UNESCO と OECD などのような国際的組織が次々に成立したのにつれて、もっと広い範囲で、すなわち国際的な視点から、高等教育に関する研究がますます注目されるようになった。具体的には、19世紀に発足した、主に比較的視点からみた教育研究は、1960年代前後から、徐々に独立した国家・民族を研究対象に、すなわち国家・民族という基本単位に基づいて、国際的視野からみた教育研究、いわば国際的教育研究に転換するようになった。例えば、1960年頃から、アメリカをはじめ、西洋の主要先進国及び多くの国際組織における研究者は、留学教育、経済・技術援助と関連国の「経済離陸」との関係などをめぐって、様々に比較的・国際的な研究を行った²⁾。具体的には、国際的な視点から一国の経済発展と教育投資、教育コストと職業、また高等教育と職業の関係などの研究が、当時の高等教育研究分野における主要な国際的課題として行われていた³⁾。その結果、1960年代に、国際的教育に関する理論と実践の研究は、大きな成果を挙げた。

ここで留意すべきは、1960年代まで、今日広く使われている高等教育の国際化 (internationalization of higher education) という言葉の定義が、ある意味で国際的教育 (international education) と同じように扱われていたということである。例えば、『高等教育の国際百科全書』(第5巻)の「高等教育の国際化」項目には、1969年にアメリカの学者 R. Freeman Butts が出版した著書の中の国際的教育に関する定義がそのまま引用されている。また高等教育の国際化の具体的な構成要素は、「カリキュラムの国際的内容、訓練と研究と関連ある学者と学生の国際的流動、及び国境を超えての教育的支援と協力を保証するシステムの配置」が含まれている⁴⁾。さらに、この百科全書は、国際的研究 (international studies)、国際化プログラム (international programs)、あるいは異文化間のプログラム (intercultural programs) などの用語も、ある程度で国際化と同じような意味で使用できると述べている。特にヨーロッパと北米においては、外国地域研究 (foreign area studies)、非西洋研究 (non-Western studies)、及び国際関係 (international relations) までも、ある程度で高等教育の国際化を指すことができると指摘している⁵⁾。要するに、1960年代までの比較的・国際的教育を今日使われている国際化の教育と同じように捉えることができるであろう。

1970年代以降、欧米諸国において、経済的なグローバル化の始動によって、比較的・国際的教育に関する研究は新しい段階に入ってきた。つまり教育の国際化に関する研究が登場するようになってきた。特に1990年代以降、EUを中心に、欧米諸国において、高等教育のグローバル化や高等教育の国際化という名称がついた様々な研究が著しく増えてきた。例えば、1997年だけにおいて、グローバル化と大学の関係、あるいは高等教育の国際化を主題に行われた会議は、世界の各地で開かれた会議やシンポジウムの半分以上を占めたということである⁶⁾。グローバル化の急速な進展について、Waters は、「グローバル化は1990年代のコンセプトである」と指摘している⁷⁾。すなわち1990年代以降、グローバル化と国際化との関係は、高等教育の国際化に関する研究の一つの重要な課題となっている。

1970年代以降、欧米諸国において、高等教育の国際化に関する研究の歴史的展開は、大きく二つの段階に分けることができるであろう。すなわち、第1段階では、主に国際化の必要性、国際化の概念、指標と特質、政策の提言、及び留学生問題を中心とした、人的な国際流動などの研究が行わ

れていた。それに対して、第2段階では、特に経済的、政治的、文化的なグローバル化との関係、グローバル化の進展への対応、グローバル化時代の高等教育の国際化の定義、地位、指標、及び実現方法に関する研究が大いに展開されている。

一方、日本における高等教育の国際化の課題が政府と学界に本格的に注目されるようになったのは、1976年にOECD教育調査団による『日本の教育政策』という報告書が刊行された後のことである。それ以来、日本における高等教育の国際化に関する研究の展開は、若干の違いはあるが、基本的には欧米のそれと同じく、おおまかに二つの時期に分けられる。すなわち1970年代から1990年代前半までの研究は、主に高等教育の国際化の概念、可能性、問題点、政策の提言、特に留学生と教員などの国際交流などの課題をめぐって展開されていた。また、1990年代中期から現在までの研究は、経済などのグローバル化の進展に伴う高等教育の国際化のあり方、グローバル化と国際化との関係、及び国際化の対策などを中心に行われていると言える。

勿論、各国・地域における高等教育の国際化が直面する課題及び進行するプロセスなどは異なっており、高等教育の国際化をめぐる研究課題も様々である。従って、それぞれの国々におけるこうした研究の歴史的展開には一致しない点もある。例えば、中国において、1950年代後半から1970年代末まで、高等教育の国際交流が殆ど行われていなかったために、この期間にわたる高等教育の国際化に関する研究は特に乏しいと思われる。中国における高等教育の国際化に関する研究は、1980年代、特に1990年代中期以降から本格的に行われるようになったため、欧米諸国と日本より遥かに遅れていると考えられる。

欧米諸国と日本に比べて、中国は明らかに遅れているが、中国における高等教育の国際化に関する研究の展開も、基本的には1980年代の国際化の必要性、定義、留学生問題、及び国際化に関する研究から、1990年代中期以後の国際化とグローバル化との関係、特に経済的なグローバル化の進展に伴う高等教育の国際化を実現する具体的な措置などへの転換という特徴をもつといえることができる。

3. 研究の主な課題

以下、高等教育の国際化研究の歴史的展開に関する考察を踏まえて、主に1970年代以降、欧米諸国、日本及び中国において、特に注目された四つの重要な研究課題をピックアップして、具体的に考えてみたいと思う。

(1)国際化の概念、指標、特質と内容などの解明

国際化の概念は多義的であり、その定義は、各国・地域によって違っているだけでなく、時代によっても変わっている。以下、1960年代までの高等教育の国際化の概念を簡単に整理したうえで、日中比較を中心に、1970年代以降の高等教育の国際化の概念、構成要素及び各国の特質についての研究を取り上げることにする。

前に述べたように、1970年代から、日本において、既に高等教育の国際性の特質、国際化の指標

及びその内容的側面に関する研究が展開されてきたが、国際化の概念に関する研究に、特に貢献があるのは、1980、90年代の喜多村和之と江淵一公によって行われた研究成果であろう。具体的には、1980年代、喜多村和之が提出した「通用性」、「交流性」及び「開放性」という日本の大学の国際性をはかる三つの指標は⁸⁾、直接的に国際化に対して定義したものではないが、それ以後の日本と中国における高等教育の国際化に関する研究に大きな影響を与えていると思われる。また1990年代、江淵一公は、国際化概念の日英語比較から、「自動詞としての国際化」と「他動詞としての国際化」を分析したことに基づいて、「国際化とは、国家相互間」において、「共通化・共同化」あるいは「共有化」、そして「相互依存関係の強化」という方向で生起している社会的・文化的変容過程（相互的自己調整過程）を指すと指摘している⁹⁾。日本において、特に1990年代、全般的、かつ系統的に高等教育の国際化について研究し、多くの成果をあげた研究者は、江淵一公であると言えるであろう。

一方、中国においては、国際化の概念に関しては、これまでの多くの研究は、世界に目を向けると共に、自国の文化伝統を保持し、また自国の優秀な教育文化を伝え広げるといった側面を強調している。すなわち国際化の動きの中で、伝統・民族性の側面が特に強調されている。例えば、中国語の『教育大辞典』は、国際化の具体的な特徴について、主として自国の伝統・文化を保持すると共に国際高等教育の経験を吸収する、世界に目を向けて人材を養成する、外国語教育を強化し、国際化課程を設置する、人的な国際交流を促進する、及び教育と学術的な国際協力を積極的に行うという五つの側面に反映されていると指摘している¹⁰⁾。また、1999年の王一兵、張世紅と白永毅の研究も、大学は世界に目を向けている一方で、海外に自国の教育と文化の精粹を伝達することも重要であると強調している¹¹⁾。

高等教育の国際化の構成要素に関しては、江淵一公は、国際化の過程は、価値（value）・システム（system）・ルール（rule）・規範（norm）・秩序（order）の五つの次元にかかわる過程であると指摘している¹²⁾。これに対して、中国の多くの学者は、それは教育、研究及び組織管理の国際化という三つの側面が含まれ、具体的には、学生、教員と研究スタッフの国家間の流動を意味するだけでなく、情報・資料の国際的な流れ、国際意識の養成、及び学位を含め、様々な相互に通用できる高等教育システムの設立も含まれていると述べている¹³⁾。

日中両国における高等教育の国際化の特質については、武者小路公秀と喜多村和之及び天野郁夫などの学者による歴史的な視点からみた日本の大学の特質に関する分析が特に注目されている。例えば、天野郁夫は、明治維新以後に成立した日本の大学の国際性を「タテの国際性」と呼び、ヨーロッパ諸国の大学に見られる同一文化圏内での「ヨコの国際性」と対比させている¹⁴⁾。

一方、中国の張世紅と白永毅は、国際交流と国際化とは異なっていると指摘したうえで、100年前、中国が既に高等教育の国際交流を行っていたが、まだ本格的に国際化への道に足を踏み出していないと述べている¹⁵⁾。また、王英傑と高益民も、歴史的視点から、発展途上国にとっては、20世紀末の高等教育の国際化は依然として「西洋化」を意味していると指摘している¹⁶⁾。

(2) グローバル化と国際化の関係をめぐる論争

グローバル化の動きは既に1970年代の初頭から展開され始めていたが¹⁷⁾、経済、政治、文化などのグローバル化が急速的に進展し、特に高等教育に大きな影響を与えるようになったのは、1989年のベルリンの壁の崩壊、及び1990年代における情報技術の発達の時期であったと言えるであろう。前に指摘したように、1990年代中期以降、高等教育に関連する様々な出版物や国際会議などからみると、高等教育の国際化と経済的、政治的、及び文化的なグローバル化との関係をめぐる研究が著しく増えてきたのである。具体的には、以下のような三つの議論を中心に行われている。

第1に、高等教育のグローバル化は同時に高等教育の国際化を意味し、両方が交換的に使用できるという議論である。日本において、こうした見方をもつ学者が多いようである。例えば、江淵一公は、平成2年の「高等教育計画部会における審議の概要について」という報告の中の高等教育グローバル化に関する定義を分析したうえで、「国際化の“目標”はやはり『国際的共同化』（グローバル化）であろうかと思う」、また「高等教育グローバル化は、これまでいわれてきた『大学の国際化』とほとんど変わるところはない。両者はまったく交換的に使われていると解しても差し支えないであろう」と述べている¹⁸⁾。

第2に、以上の観点に対して、1990年代以降、多くの学者は、高等教育の国際化が高等教育のグローバル化と同じコンセプトではない、前者は経済的、文化的なグローバル化の進展・影響によって生まれた結果であり、高等教育の領域に特に経済的グローバル化に対応する一つの必然的で、また重要な対策と措置であると述べている。例えば、カナダの学者Jane Knightは、1990年代初期から高等教育の国際化に関して、様々な課題研究を行っている。彼女は、高等教育のグローバル化は高等教育の国際化とは違った概念であると強調し、その二つの関係について、「グローバル化とは、国境を越えての技術、経済、人、価値観及びアイデアなどの流動のことである。またある国・民族に存在した独特な歴史、伝統と文化などによって、グローバル化が各国に与えた影響も異なっている。一方、高等教育の国際化は、ある国がグローバル化の影響に対応する一つの方法であると同時に、自国の特質も尊重しているということである」と指摘している¹⁹⁾。また、オーストラリアのBran Denmanも、歴史的・比較的な視野から、グローバル化が高等教育の国際化に及ぼした影響の検討に基づいて、ほぼ同じような結論をまとめている²⁰⁾。

以上のような議論と関連して、1999年に、喜多村和之は、高等教育の国際化は「グローバル化という嵐の直撃に堪え得るような手だてを講じて、ソフトランディングを可能にして、破滅を免れるための戦略を考えることだ」という見解を示している²¹⁾。

一方、中国においては、これまでのほとんどの先行研究は、基本的には高等教育の国際化と高等教育のグローバル化とを明確に異なるものとして用いており、高等教育の国際化は欧米の先進諸国が主導している経済のグローバル化（中国語で「経済全球化」、「経済一体化」）の進展と影響によって、高等教育において必然的に生まれた結果であると指摘している。例えば、傅志田は「高等教育の国際化は全球経済一体化の必然的結果である」と述べている²²⁾。また、楊徳広と王勤も、「高等教育の国際化は経済全球化による必然であり、社会発展の必然である」と言明している²³⁾。それ以外にも、多くの研究は、高等教育のグローバル化と高等教育の国際化とを区別したうえで、前者は

基本的には新しい時代における西洋の主要先進諸国による経済のグローバル化に伴う発展途上国への教育的・文化的な植民化の一環として行われているプロセスであるものと指摘し、こうした挑戦に対応するために、発展途上国が高等教育の国際化を目指すと同時に、高等教育の民族化と「本土化」をも目指すことが重要であると強調している²⁴⁾。

日中両国における研究は、高等教育グローバル化の若干の特徴などに触れているが、この二つの概念に関する規定が、具体的にどう異なっているのかという点に関しては、あまり多くの成果が出ていないと言える。

第3に、概念的に、グローバル化は国際化と異なっているが、基本的には両者は弁証的な関係を持っているという見方である。例えば、イギリスの学者 Peter Scott は、天野郁夫と同じように²⁵⁾、高等教育の国際化は既に国家・民族の大学となった近代以後の時代に行われてきたと指摘し、その国際化 (internationalization) がグローバル化 (globalization) と順次の (linear) あるいは累積的な (cumulative) 関係ではなく、むしろ弁証的な関係を持っていると述べている。具体的には、「グローバル化はけっして簡単に古い国際主義の繰り返しであるとはみられないし、国際化のもっと高い発展段階でもない。ある意味で、新しいグローバル化は古い国際化の競争相手である」と解明している²⁶⁾。従って、国家の存在を前提として行われている国際化と、自然的に国境を乗り越えて行われるグローバル化との間には、様々な葛藤や矛盾が生じることになっている。

(3) 留学生を中心とする人的流動、教育内容と質的評価などの研究

留学生、教員と学者などの人的な国際的流動に関しては、古くから研究が展開されてきた。1970年代以降、主要な先進国を対象に、現地調査に基づいて、全面的、かつ実証的にそれぞれの国々における留学生の歴史、政策、留学生と外国人教員任用の実態、留学生の流動的な特徴と原因、及び留学生を受け入れる国と出身国に対する影響などの研究が、急速的に行われてきた。具体的には、以下のような先行研究成果を特に挙げる価値があると思う。

まず、受け入れる国における留学生政策について、Alice Chandler による先行研究が留学生教育に大きな影響を及ぼしている。現地訪問調査と関係者とのインタビューを通して、Alice はイギリス、フランス、ドイツ、カナダ、日本とオーストラリアという六つの国において留学生政策が制定された背景、その相互的な相違点、及び各国の関連政策が留学生流動に与えた影響などについて詳しく分析している²⁷⁾。彼女の研究成果、特に研究方法は、現在においても多くの研究者によって使われている。

次に、1980年代から、留学生の国・地域別による流動の特徴と類型、及びその原因の分析に関しても、多くの成果が挙げられている。そのうち Sirowy, Inkeles, 及び Cummings によって行われていた留学生による世界的な流動類型化の仮説、それに関する原因の分析と解明をめぐる研究成果は当時の多くの国における留学生に関する政策に影響を与えている²⁸⁾。

こうした動きの中、日本においては1980年から、広島大学大学教育研究センターを中心に、留学生交流の歴史的研究、日本の留学生の実態と現状、受け入れ政策の研究、留学生教育と支援体制の研究(そのうち特にアジアからの留学生に関する実態研究)、留学生が日本の大学教育に及ぼす影響、

及び外国人教員任用などの問題について、日本国内・海外調査に基づいて、系統的に実証研究が展開されていた²⁹⁾。また、1997年に、名古屋大学の馬越徹も、海外に1980年代以降の日本の留学生に関する政策、現状、問題点、及び政策提言などを紹介している³⁰⁾。特に1989年に、広島大学大学教育研究センターで、「留学生と高等教育の国際化」について開かれた国際会議では、国際的・比較的な視点から、1980年代までの、主要先進国における留学生に関する政策、実践、及び文化などの問題について議論されていた。後ほど出版された論文集は、1980年代までの先進諸国における留学生問題に関する研究の実態とレベルを如実に反映していると言えるであろう³¹⁾。

1990年代以降、EUを中心にヨーロッパ諸国における様々な国際化計画・プロジェクトなどが進められた一方で、人的な国際流動に関する研究以外に、カリキュラムの国際化に関する研究も急速に展開されてきた。例えば、1994年と1996年に、OECDによって出版された代表的な国際化に関する研究論文集は、OECDの主要加盟国における国際化されたカリキュラムの実態を調査分析したうえで、カリキュラムの国際化の仮説的類型化を行っている³²⁾。

さらに、1994年以降、高等教育の質的評価と国際化との関係という視野に基づいて、IMHE、OECDが編集した『高等教育の質と国際化』は、高等教育機関レベルの国際化に対する質的評価のプロセスを整理しながら、五つの国における国際化の政策、過程及びプログラムの質を考察し、国際化の質的保証のための具体的な指標、フレームワーク、アプローチと問題点を挙げている³³⁾。

要するに、1990年代に入ると、高等教育の国際化の概念、指標、人的な国際流動などの研究が行われてきたほかに、高等教育の内部の中核と言われるカリキュラムの国際化、及びグローバル化の時代における高等教育の国際化の質的評価に関する研究も全面的に展開されてきた。

(4)地域別・国別比較研究

この領域に関しては、二つの時期に分けられる。すなわち1995年までの第1期では、主に欧米先進国、特にOECD加盟国を中心に問題が提起されてきた。例えば、1995年、OECDによる『高等教育の国際化への戦略—オーストラリア、カナダ、ヨーロッパとアメリカに関する比較的研究』は、以上のような国・地域のそれぞれにおける機関レベルの国際化の政策、実態と戦略などを取り上げている³⁴⁾。1995年中期以降の第2期で、欧米主要諸国以外、特にアジア・太平洋地域における高等教育の国際化をめぐる研究が大幅に増えてきた。例えば、Jane KnightとHands De Witは、オーストラリア、香港、インドネシア、日本、マレーシア、ニュージーランドとシンガポールにおける高等教育の国際化の歴史と現実の背景、国際化へのアプローチ、プログラム、組織的戦略、財政、問題点と挑戦などについて、『アジア・太平洋地域における高等教育の国際化』という研究を行っている³⁵⁾。

ヨーロッパにおける国際化の地域的比較的研究が進展した一方で、日中両国において、1990年代中期以来、欧米諸国における高等教育の国際化の動向、現状、政策などについて比較研究が行われている。例えば、1990年代後半、主に江淵一公によるヨーロッパ諸国における高等教育の国際化の潮流と新展開、九州大学の望田研吾を代表者としての『アジア諸国における教育の国際化に関する総合的比較研究』、及び中留武昭によるアメリカの大学におけるカリキュラム国際化のケース

タディなどの比較研究が成果として挙げられる³⁶⁾。

中国における高等教育の国際化の研究は、基本的には海外の国際化の概念と対策などの紹介から1990年代以降にスタートしている。それゆえ、欧米及び日本と比較する視点からの研究、特に日本、アメリカ、EU及びアジア・太平洋地域における高等教育の国際化の歴史、現状、政策と措置、及び教訓と経験などに関する研究は遥かに多いと思われる³⁷⁾。

ここで留意すべきなのは、中国において以上のような比較的研究は、基本的には中国の高等教育の国際化に関する政策提言、例えば、国際化に対してどんな立場をとるべきか、国際化が中国の高等教育に及ぼす影響はどのようなものなのか、といった開発的・実践的な課題のために行われてきたということである。具体的には、ほとんどの研究は、比較的研究を通して、国際化がグローバル化時代の中国における高等教育発展の唯一の活路であり、中国の高等教育が国際化の流れに積極的に参画しなければならない、国際化の観念が中国における未来の高等教育発展の重要な指導思想の一つにならなければならないということを強調している³⁸⁾。しかし、これに対して、若干の研究は、高等教育の国際化が中国の高等教育にデメリットの影響を及ぼすことも指摘している。例えば、傅志田は、「高等教育の国際化が、全面的に国際交流と協力を促進し、新しい技術を伝達し、経済の成長を加速し、さらには人民の総合的な素質を向上する一方で、一国の主権と地元の伝統文化を侵食し、その国の経済的・社会的な安定を脅し、政治、宗教、文化と社会の諸側面に問題をもたらす恐れがある」と指摘している³⁹⁾。

以上述べたことから明らかなように、中国における国際化に関する研究は、日本とほぼ同じように、基本的には啓発的な色彩をもち、国際化への努力、及び政策提言に関する研究が多かったと言える⁴⁰⁾。

4. まとめ

以上、分析したことが示したように、これまでの高等教育の国際化に関する研究の歴史的展開と先行研究には、主に次のような特徴があると思う。

まずもっとも特徴的なのは、高等教育の国際化の研究には、国・地域によって、多くの基本概念、用語と指標、特に研究対象と内容の理解が異なっているだけでなく、それらの概念、内容及び構成要素などが時代によって次第に変わってきたということである。例えば、日本においては、江淵一公は、国際化概念の定義について、日英語間に対立的違いがあり、また英語の「他動詞としての国際化」概念は国際秩序のなかで“覇権”をもつ国家から生まれた歴史的な概念であり、他方、「自動詞としての国際化」概念は、“大国”に合わせていくことを余儀なくされた“小国”の国際社会への参加過程から生まれてきた概念であると指摘している⁴¹⁾。他方、日英と違って、中国においては、多くの研究は、世界に目を向けている一方で、特に自国の文化的伝統と特質を保持しなければならないという側面を強調している。

また、時代によって、国際化への理解も常に変わっている。例えば、日本の明治と中国の清朝の西洋化・近代化をも国際化と呼ぶようになった。そうであれば、当時の両国における高等教育が国

際社会への「仲間入り」を志向する過程であった西洋化・近代化を今日の高等教育の国際化と同じように捉えられるであろう。日中だけではなく、西洋においても、国際化の定義と構成要素などへの解釈は時代によって変化してきた。例えば、先に述べたように、欧米において、1960、70年代頃、国際研究、国際化プログラム、異文化間のプログラム、外国地域研究、非西洋研究などの用語も、ある程度で国際化と同じような意味で使用されていた。

次に目立つのは、少なくとも1990年代前半の高等教育の国際化に関する研究の歴史的展開と先行研究が、基本的には欧米などの先進諸国を中心に行われていたということである。具体的には、1970年代まで、こうした研究の中心地がアメリカであったのに対して、1980年代以降は、EU諸国を中心にヨーロッパに転換してきている。西洋と比べて、日中両国における国際化の研究は明らかに遅れ、特に中国において、この研究が本格的に展開されるようになったのは、1990年代である。また、OECDなどの国際組織による研究刊行物からみると、高等教育の国際化に関する研究対象となったのは、基本的には1980年代の欧米諸国を中心に、次第に1990年代中期以降のアジア・対太平洋地域へと転換するようになってきていることを示している。

最後に、これまでの先行研究は、主にこれまでの各国・地域における国際化の政策と実践に絞って、国際化の背景、沿革、及び現状に関して行われている。すなわち、過去と現状に対する説明・解釈的な研究が多いのではないと思われる。つまり「現象としての国際化」に関する研究が多い。経済などのグローバル化の急速な進展が今後予想される中で、現在、高等教育の国際化がどのような段階に進められているのか、将来的にどのような位置に置かれるべきか、グローバル化へどのように対応すべきか、また政治的、経済的、文化的に異なった国々が、どのようにして高等教育の国際化を実現すべきか、つまり「未来・目標としての国際化」を、どのように捉えるのかなどのような研究は、まだ少ないのではないだろうか。

【注】

- 1) 江淵一公著『大学国際化の研究』、玉川大学出版部、1997年、42頁。
- 2) Hailey W M H (baron). *An African Survey: A Study of Problems Arising in Africa South of the Sahara*, rev. end. Oxford University Press. London, 1956. Torsten Husen. *The International Encyclopedia of Education, Research and Studies*, Volume 5, Pergamon Press, p.2665.
- 3) Bereday GZF (ed.) *Essays on World Education: The Crisis of Supply and Demand*. Oxford University Press, London, 1969.
- 4) Butts, R. F. *America's Role in International Education: A Perspective on Thirty Years*. Chicago : National Society for the Study of Education, 1969.
- 5) *The International Encyclopedia of Higher Education*, Volume 5 G-I Jossey-Bass Publishers, 1977, p. 2293.
- 6) Jan Currie Janice Newson. *Universities and Globalization-Critical Perspective*, Sage Publications, 1998, p.1.

- 7) Waters. M. *Globalization*, London and New York, Routledge, 1995.
- 8) 喜多村和之『大学教育の国際化—外からみた日本の大学』(増補版), 玉川大学出版部, 1984年。
- 9) 江淵一公, 前掲書, 1997年, 52-53頁。
- 10) 顧明遠主編『教育大辞典』増訂合編本(上), 上海教育出版社, 1998年, 402頁。
- 11) 王一兵「高等教育国際化—背景, 趨勢与戰略選択」『教育發展研究』, 1999年, 第2期, 1-5頁。
張世紅・白永毅「論大学国際化」『清華大学教育研究』, 1999年, 第3期, 26頁。
- 12) 江淵一公, 前掲書, 52-53頁。
- 13) 張世紅・白永毅, 前掲論文, 25頁。顧明遠・薛理銀「教育国際化与比較教育的課題」『比較教育研究』, 外国教育研究所所慶專刊, 1995年10月, 12-18頁。
- 14) 天野郁夫「大学の国際化と日本化」『大学の国際化—第6回(1977年度)研究員集会の記録』(大学研究ノート第32号), 広島大学大学教育研究センター, 26-28頁。
- 15) 張世紅・白永毅, 前掲論文, 26頁。
- 16) 王英傑・高益民「高等教育的国際化—21世紀中国高等教育發展的重要課題」『清華大学教育研究』, 2000年第2期, 16-21頁。
- 17) Peter Jarvis. "Globalization, the Learning Society and Comparative Education", *Comparative Education*. Volume36 No. 3, 2000, p.334.
- 18) 江淵一公, 前掲書, 1997年, 39, 137頁。
- 19) IMHE. *Quality and Internationalization in Higher Education*, OECD, 1999, p.14.
- 20) Bran Denman. *Globalization and Its Impact on International University Cooperation*, IMHE General Conference, 11-13 September 2000, OECD, Paris.
- 21) 喜多村和之「『グローバリゼーション』と現代の高等教育」『IDE 現代の高等教育』409, 1999年7月号, 15-16頁。
- 22) 傅志田「關於我国高等教育国際化的思考」『上海教育』, 2001年, 第9期, <http://www.edu.cn/special/showarticle.php?id>。
- 23) 楊徳広・王勤「從經濟全球化到教育国際化的思考」『二十一教育論壇』 <http://www.edu.cn/special/showarticle.php?id>。
- 24) 項賢明「教育: 全球化、本土化与本土成長—從比較教育学的角度觀照」『北京師範大学学报』(人文社会科学版), 2001年第2期, 32-41頁。龐紅衛・方凌雁「略論全球化教育的陷阱」『教育發展研究』, 2001年第3期, <http://www.edu.cn/special/showarticle.php?id>。權偉太「迎接全球化的挑戰 加快高等教育的發展」『中国鉱業大学学报』(社科版), 2000年第4期, 99-103頁。
- 25) 天野郁夫, 前掲論文, 25-32頁。
- 26) Peter Scott. *The Globalization of Higher Education*, The Society for Research into Higher Education & Open University Press, Published by SRHE and Open University Press, 1998, pp.123-124.
- 27) Chandler A. *Obligation or Opportunity: Foreign Student Policy in Six Major Receiving Countries*. Institute of International Education, New York, 1989.
- 28) Sirowy L, Inkeles A, "University-Level student exchanges : the US role in global perspective". In

- Barber E (ed.). *Foreign Student Flows : Their Significance for American Higher Education*. Institute of International Education, New York, 1985. Cummings W K. "examining trends in the flow of Asian students to the United States". *NAFSA Newsletter*, Nos. 5 and 6 , National Association on Foreign Student Affairs, Washington D.C.
- 29) 『日本の大学における外国人教員—全国調査結果の概要』(大学研究ノート第43号), 広島大学大学教育研究センター, 1980年1月, 85頁。『日本の大学院教育に関する留学生の意見調査』(大学研究ノート第52号), 広島大学大学教育研究センター, 1982年, 124頁。二宮 皓『日本の大学の国際化と大学教育に対する外国人留学生のインパクトに関する研究』昭和58年度文部省科学研究費補助金研究成果報告書, 昭和59年3月, 103頁。江淵一公, 前掲書, 1997年, 14-20頁。
- 30) Toru Umakoshi. "Internationalization of Japanese higher education in the 1980's and early 1990's", *Higher Education* 34, Kluwer Academic Publishers, 1997, p.259-273.
- 31) Proceedings of OECD/Japan Seminar on *Higher Education and the Flow of Foreign Students, Foreign Students and Internationalization of Higher Education*, Research Institute for Higher Education, Hiroshima University, 1989.
- 32) OECD/CERI, *Curriculum Development for Internationalization: Guidelines for Country Case Studies*, OECD, Paris, and 17 June 1994. OECD Documents, *Internationalization of Higher Education*, OECD, 1996.
- 33) IMHE. *Quality and Internationalization in Higher Education*, OECD, 1999.
- 34) Hands de Wit. *Strategies for Internationalization of Higher Education : A Comparative Study of Australia, Canada, Europe and the United States of America*, EAIE, Amsterdam, 1995.
- 35) Jane Knight and Hans de Wit (ed.). *Internationalization of Higher Education in Asia Pacific Countries*, EAIE, Amsterdam, 1997.
- 36) 江淵一公, 前掲書, 1997年。望田研吾『アジア諸国における教育の国際化に関する総合的比較研究』平成10-12年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(2))研究成果報告書, 平成13年3月。中留武昭「アメリカの大学におけるカリキュラムマネジメントの戦略—カリキュラム国際化のケーススタディ(上)」『季刊教育法』No.127, 2000年, 95-113頁。「アメリカの大学におけるカリキュラムマネジメントの戦略—カリキュラム国際化のケーススタディ(下)」『季刊教育法』No.128, 2001年, 100-112頁。
- 37) 王培棟・李銳「論日本高等教育国際化」総主編陳学飛『中国高等教育研究50年(1949-1999)』, 北京教育科学出版社, 1656-1659頁。謝作栩「美国高等教育課程国際化的歴史演進」『教育研究』1996年第6期, 65-68頁。王一兵「亜太地域的高等教育国際化、私営化和法人化現象透視」総主編陳学飛『中国高等教育研究50年(1949-1999)』, 北京教育科学出版社, 1664-1666頁。北京大学高等教育科学研究所『中国、美国及欧盟高等教育国際化研究』(全国教育科学“九五”规划教育部重点課題)研究成果報告書, 2001年3月。
- 38) 王英傑・高益民, 前掲論文, 16-21頁。
- 39) 傅志出, 前掲論文。
- 40) 米澤彰純「大学生の海外経験とその職業生活へのインパクト—日欧卒業生調査に基づいて」, 2000

年9月16日日本教育社会学会（北海道大学）。

41) 江淵一公，前掲書，1997年，43-44頁。

History and Achievements of Research in the Internationalization of Higher Education

Futao HUANG *

The paper deals with the history and achievements of research in the field of internationalization of higher education mainly from a comparative perspective. In the first part, the history of research undertaken on this field of study is divided into several phases and the characteristics of each phase were discussed. In the second part, four important topics of researches on this field of study are chosen and different viewpoints are presented and analyzed in detail. Based on the historical and comparative review, the author reached three conclusions :

- 1) The concepts of the internationalization of higher education vary not only according to different times, but also according to different countries.
- 2) Before the 1980s, most research was focused on Western countries, whereas, since the 1990s more and more attention has been paid to Asia and Pacific regions.
- 3) Most of the research achievements resulted in terms of outcomes solely describing or explaining what had happened in the internationalization of higher education in some countries, whereas, little research has been conducted on the trends or practice of internationalization of higher education in the future, especially concerning such issues as how to promote the progress of internationalization of higher education in different countries in the era of globalization.

* Associate Professor, Research Institute for Higher Education, Hiroshima University

